

東日本大震災 愛知民医連支援ニュース

NO. 13 2011. 4. 9 愛知民医連事務局発

民医連のつながりの力を実感！

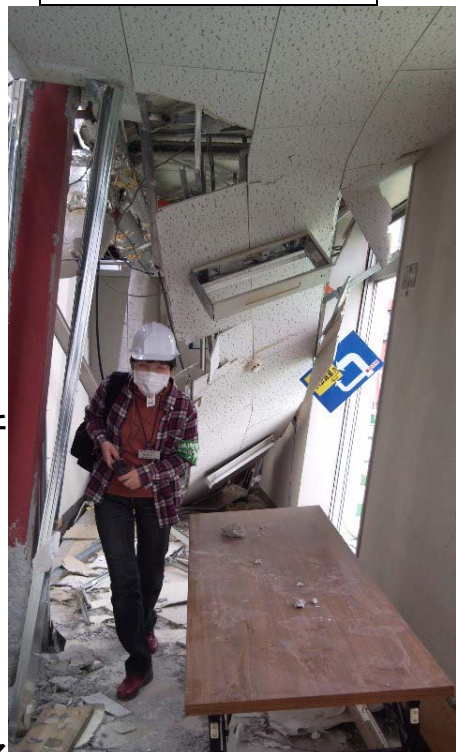
＜第6次支援隊（小岩さん）の報告より＞

*小岩（名南・事務）は仙台市の長町病院地域と若林クリニック地域の全戸訪問に行きました。大阪・西淀の看護師さんと滋賀の介護士さんと3人でチームを組み、医療などで困っていることはないか確認で回りました。最も印象に残っているのは最後に訪問したお宅。被災前後から血圧が170近いという女性と対話し、看護師さんが血圧測定すると昨日と同じような状況。「早めに受診してくださいね」と声をかけ家を出ようと挨拶しかけたら、急に看護師さんの手を握り締め「妹が津波でなくなりお嫁さんもまだ見つからないんです」と泣き出しました。それまで笑顔で話していたのに、堰を切ったように泣き出しました。ニュースではよく聞いた言葉ですが、実際に目の前の人から自分が聞くと本当に言葉が出ませんでした。訪問では、働く場所が違う人たちが特に相談もしないのに、すぐに訪問で対話できる民医連のつながりの力を実感しました。

地域訪問で声をかける西淀の看護師さん



長町クリニックの崩壊現場



*7日23時30分過ぎに宮城県で震度6強を観測した地震の発生直後、全国の支援者約120名はいったん病院駐車場に避難し、その後現地対策本部での待機となりました。坂総合病院は地震発生を受けて救急患者が多数来院することも想定し、0時ごろからトリアージ体制に移行。現地職員も緊急出動し、小岩は0時30分ごろから現地事務の方と大阪からの支援事務の方と、イエローブースの書記担当に入り、トリアージタグから氏名などの個人情報を書き写し紙カルテと壁に掲示する作業に当たりました。坂のみなさんの素早い初動態勢の立ち上げと全国からの支援者を含めた民医連の連携の良さには正直びっくりしました。